

1890年劇作家チェーホフの樺太3カ月踏査

—地理と文芸などの接触考—

籠瀬良明

- I. 序 言
- II. 主題・時代・地域
- III. 大泊へ上陸までのチェーホフ
- IV. 南部中央低地帯踏査
- V. 医と文芸——チェーホフと鷗外
- VI. 漱石にひかれた寅彦
- VII. 雪氷ひとすじの宇吉郎
- VIII. 総合と創造
- IX. 補足と摘録

I. 序 言

(1) 資料——チェーホフの作品と明治末地形図

歴史地理学では、通常は対象地域の当時を景観的に再現したい場合、調査研究にはそれにふさわしい方途が加味される。1890年は一世紀の過去。その上、今もなお米・西欧と同程度には地域・地点を目視し難い。ロシア側の資料もままならない。チェーホフ¹⁾の作品²⁾を重視するのは第一に以上の対策として、第二に地理と文芸などとの関連を推察するためである。地図類については関係箇所解説する。

(2) 情感——理屈ではなく、これが執筆の動因

若年の頃、胸のうちに寒くわびしい北の地への哀歌が芽生えていた。それがもう少し心がふくらんだ頃の1939年、まだ見ぬ択捉島紗那の海崖から、都を棄てた一青年が投身したが帰京のはめになる幼稚な一編を印刷した。4年後出版の別書では、冒頭に千島列島の占守島と樺太を

置いた。

そうした思いが続いた後の1961年、求められるまま帯広など5地点をつなげて講演した。別に自分だけの目的で、旭川の会を終えたその足で天塩川岸を調査³⁾、宗谷岬から戦後はどうなっているだろうかとの思いを込めて樺太の南端あたりを眺めやった。

北海道から帰京した同じ年「北帰行」が出た。「窓は夜露にぬれて 都すでに遠のく 北へ帰る旅人ひとり 涙流れてやまず……」。わけても心を濡らすのは、末尾の「さらば祖国 愛しきひとよ 明日はいずこの町か」にひかれる。

情感が溢れるのは大正リベラリズムの余韻でなければ、内に淀みながら果し得ない放浪のわが邪心のためか。

II. 主題・時代・地域

(1) 樺太にかかわる3つのテーマ

第一は宗谷海峡に近い大泊と栄浜間の生活空間、第二は敷香から国境までの山麓帯、第三は東西両海岸の沖合に連なる不可解な小島(岩)列である。

第一の疑点はチェーホフ著『サハリン島』と、南樺太が日本領土に戻った直後測図の5万分の1地形図、1929年同改測図、1960年作製のすぐれた25万分の1地質図⁴⁾が役立った。第二の疑点は1938年1月3日日没直前を見計らい、国境警備の警察官らを巧みに欺き、北緯50度線を強行越境した著名な女優岡田嘉子と愛人杉本良吉の通路をまず推定し、次いでその通路を山麓扇状地と推察する作業、第三の沿岸沖合は現時点では到達至難なので、樺太育ちの帰国者との面接

も取り入れた。

本小論は第一の疑点を出発点とする。

(2) 1890年頃という時代

① 1890年頃の日本——1888年市・町村制公布、翌89年大日本帝国憲法・皇室典範発布、1890年第一帝国議会召集、教育勅語、経済界不況、府県・郡制公布。国家体制が着々整備中であった。

② 1890年頃のロシア——「知能も能力も中以下のアレクサンドル三世が1881年即位してから反動は一層強まった。地下に革命の根ははびこり多くの民衆が憲法を要望」⁵⁾した。

しかし目下完全崩壊直後のソ連と、共産化前の帝政ロシアのいずれを、学者や評論家でなく、物いわぬ普通の住民が心の奥で幸せと感じているかを知ることは、極めて困難なはずである。時間がたてば正しい評価が決まるといわれるが、評価はとかく正確・不正確ではなくて外圧や政治理念に流されやすい。次の文は住民が心の真実を吐露した結論と思われるが、共産制の経験しかないことも考慮の要がある。

月刊誌『選択』1993年11月にのった無署名の紹介には『イズベスチヤ』紙が92年11月に行った世論調査によれば、20世紀で一番良かった時代は1位ブレジネフ時代、と出たという。よくいわれるようにロシア人大衆の多くがソ連時代から抜け切れずにいるからで、特に驚くには当るまい。3位はスターリン時代、4位はゴルバチョフ時代、これに対して約70年間続く共産制以前で、悪政といわれてきた帝政時代が2位と高い。この調査にあえて私見を加えるとうなる。①調査方法も結果の発表も正しく、被調査者も正直に答えているようである。②しかし70年間のしみから抜け切れれば1位にもなろう。

(3) 1890年当時の樺太の特色

最大の特色は樺太が当時帝政ロシアの流刑植民地だったことである。港であるコルサコフ(大泊)は囚人をのせた船が出入りする一中心であった。そこから北へ向かう一条の道があり、ごく小さな部落が道ぞいに点在した。囚人および刑

を終えて農民となり得た人、第三に監督指導に当る役人が住むだけの少数人口の島だった。

III. 大泊へ上陸までのチューホフ

(1) なんのために僻遠の島へ行ったか

チューホフの心境については近親・知人により、多数の見解が詳しく語られている。ロシアの東端で遠路を馬や歩行が欠かせないという苦行の行動であること、生地から医科大学生となってモスクワへ出たときは、頑健だったのが病身弱体になっており、しかも超一流の劇作家として繁忙のさなかにあつたから、踏査計画を聞いた人だけでなく、後の人も実行の奇異さに納得し難いゆえに、今にいたってもさまざまな憶測が行われている。私の管見ではチューホフの自著『サハリン島』日本訳の一人、中村融の巻末解説が妥当のように思われる。

佐藤清郎の見解にも同感である。チューホフの心境の核心に迫っていると思われるからである。「チューホフのサハリンは風光探美の旅ではない。関心事は特殊な環境におかれた人間——囚人なのである——重い心で行ったのである。観察の旅が研究調査の旅になり、やがて抗議の旅となってゆく経過にも、農奴の孫であるという出生とのつながり」⁶⁾というくだりにである。

そのような熱意と使命感なしには、直線で測っても大よそ8,000kmの遠路を単身に到達するなどの壮挙は果たせまい。

(2) サハリンへ出発まで何を準備したか

チューホフは出発までの3カ月、サハリン関係の書物・資料をできる限りあさり、そして理解した。もともと正式の医師であるから、その進め方は十分に科学的である。思いつただけで無手で飛び出す私からみて、精細周到な準備に驚くのである。

「決心から出発までの3カ月は、まさにかれのいうとおりサハリン狂であつて、頭の中も、紙の上にもサハリン以外は何もない有様で、手に入る限りサハリン関係の文献の渉猟が続く。考古学、地質学、地理学、人種学、刑法、刑務

所関係資料——およそサハリンに関係のあるものなら何でも読みあさった。それには弟と妹の援助も忘れてはならない。妹 MARIA は図書館へ通いつめて、兄のためにサハリンの記事を写している。出発までに彼はひとかどのサハリン通になっていた」⁷⁾。

(3) モスクワ・サハリン間と北部地域

チェーホフがモスクワのヤロスラフスキー駅を汽車で出発したのは1890年4月21日午後8時。汽車の短い旅と河舟のあとは長い馬背と馬車と歩行。途中持病の咳と痔とぬかるみの道やほこりの悪路に苦しみ、6月11日イルクーツク出発。6月30日ハバロフスク着。ニコラエフスクへは7月5日、サハリン島は7月10日着、モスクワ発から80日の長旅⁸⁾である(図1)⁹⁾。

チェーホフの『サハリン島』に第二章冒頭から、私の求めることばが多く並んでいる。「簡単な地理——北部サハリン到着——火事——波止場——自由農村」¹⁰⁾など。平凡というか当然とすべきか、経緯度などの正確な位置、島の長さ、

面積、地域の大区分、気候・土壌・囚人居住地・河川などを簡単に挙げ並べている。チェーホフほどの物書きなら、必要なことだけ記しにくいノイズは省くはずと考え直すが、そうした記述が自己のためにも読者にも大切としたチェーホフの態度に触れる思いになる。

(4) 船中から南部西岸の真岡を望見

チェーホフは北サハリンの要部を2カ月もかけて、アレキサンドロフスクを拠点として精査の後、9月10日汽船で日本海を南下した。航海の2日目のこと、船長は百姓家と納屋風の建物の塊りの方にわたしの注意を向け、あれがマウカ(真岡)ですよ、といったとある。集落、昆布とりと販売などのことを詳記、そのあと次のように。しかし真岡だけは未踏査で書いている。「現在ここで流刑生活を送っているのは38人、男33人女5人である。うち33人はいずれも世帯を張っていて中の3人は既に農民の身分になっている。女は悉くが徒刑囚で、いずれも内縁の妻として」¹⁰⁾と。

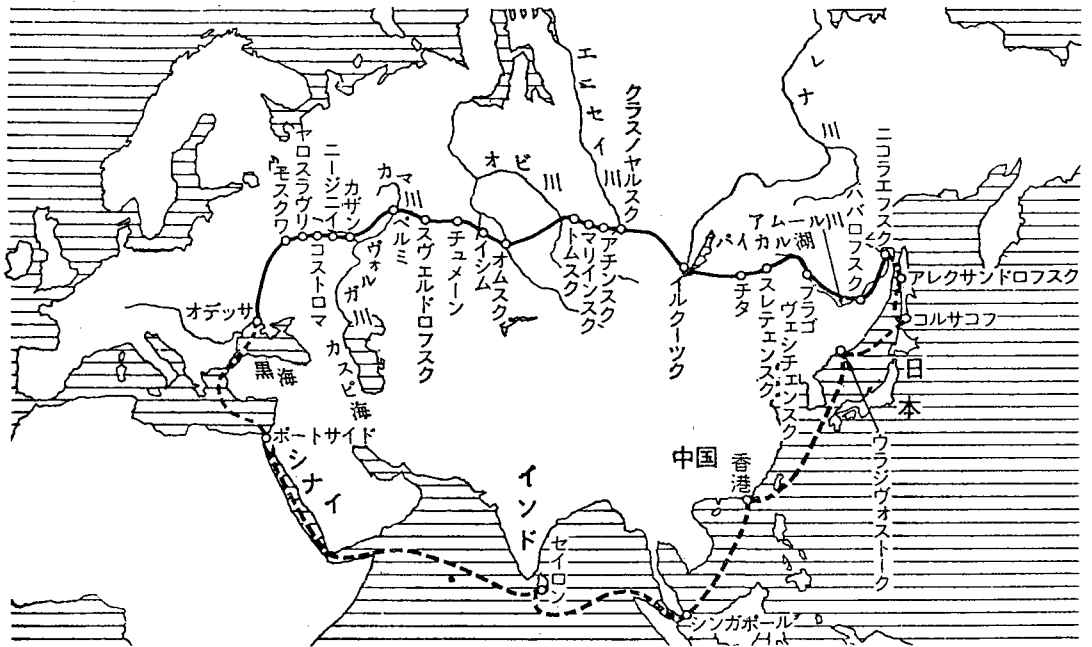


図1 チェーホフの旅(1890年)の行程

重要なのは、真岡だけ例外で、踏査せずに詳しい記事を書いた理由の詮索である。

私は『サハリン島』の記述を通じて、目が覚めるほどの重大事を、劇作家でなく、作家チェーホフから実例をもって教えられた感がする。うち一点を吟味する。

① 中身ではなく、問題は長文の出所。チェーホフは一度も真岡の土を踏めなかった。このときも寄航できず、走る船上から遠望しただけ。船長の説明か、出発前の学習か、大泊から北上してオホーツク海岸の柴浜までを往復中の耳学問か、それとも帰国後の学習か、あるいはそれら全部の融合か。

② チェーホフは劇、いわばつくりごとの大家だと単純に考え過ぎるのは誤りである。科学の心を持つ作家のすべてに適用できまいが、少なくともチェーホフの場合は、人とかかわる土地風土をわが目で見ようと努めている。『サハリン島』の記事は足を運んだ土地についてのみ記しているかとなると、ここのみは別である。

③ ここに記した真岡だけは、海上からの遠望という例外なのに、長い文章や数字で述べている。以上のことは作家にせよ、地理家にせよ、踏査は調査の一手段であることを物語っている好例といえる。チェーホフにしても想念も準備もなく漫然と半年もの時間をかけていない。可能なら踏査主義を貫き、不可能でも重要なら航行船上というチャンスを活用したのである。そのチェーホフに学びたい。

IV. 南部中央低地帯踏査

(1) チェーホフの風土への着眼

アントーン・バーヴロヴィチ・チェーホフ(1860~1904年)は、「満足な鉄道も敷かれていなかったシベリヤ大広原を、厳寒と斗い、泥濘に悩み、不便に耐え、危険をおかして踏破、世人の眼を背けしめていた罪囚の孤島サハリン」¹¹⁾へと出かけ、約2カ月を北サハリンの踏査に没頭し、次いでサハリン南部へ向かった。

ここで地理や地図を業とする私の心を打つのは「ここに興味あるのは、サハリンの移民たち

は既に30年間もツンドラ(凍土帯)の上に小麦を蒔いたり、或いは立派な道路を敷いているくせに、島内の一番暖かい部分、即ち西岸の南部は全然無視されている」¹²⁾と強調している部分。その西岸南部すなわち北海道に一番近い西能登岬をへて船は亜庭湾に入り、湾奥のコルサコフ(大泊)港へ上陸し、付近で多くの時間を費しつつ北上する。ここからオホーツク海へと抜ける、樺太・鈴谷両山脈間の広くて長い中央低地帯を柴浜まで、歩行と馬で存分に往復調査(図2)したから、チェーホフの見聞は深い。出発時の計画通り冬には入らぬ9月の踏査体験であるから、気温を中心としての風土性に着目してやってきたから、樺太の広野ではこの中央低地帯が入植地として最も将来性のあることを見てとった。自らを地理学者でもあると信じていたが、その一端は『サハリン島』13章の記載順序からも伺える。

「大泊の官衛地 一の沢・二の沢・三の沢
ソロヴィヨーフカ村 リュトガ村 裸岬村
ミツリカ村 落葉松村 ホムートフカ村 大平原村
ウラヂーミロフカ(豊原) 農場か屋号か
恋愛事件 草原村 坊さん小屋 白樺村
十字架村 大タコエ村と小タコエ村 ガルキノ・
ヴラースコエ(落合町) 樺村 ナイブーチ海」¹³⁾

既述のように、以上の順序は南端の大泊から柴浜まで、文字通り一線状で何の変哲もない、きまじめで平凡な地図(図2右)とそっくり。記述にしても同様。このすぐあとに「コルサコフスク(大泊)管区の居住者巡回は、アニーワ(亜庭)沿岸の村々からはじめよう。第一の村は日本語でポロ・アン・トマリと呼ばれている。建設は1882年のことで、以前のアイヌ部落にかわるものである。住民72 男53 女19。戸主は47人で、うち38人は水呑百姓」¹⁴⁾と。このあと囚人一人一人の病気を中心に。そのほか道路、昆布とりその他のことが、きちょうめんに書き並べてある。

同じように書き進んで、日露戦争直後南樺太の行政・軍事・文化の中心にするために日本が

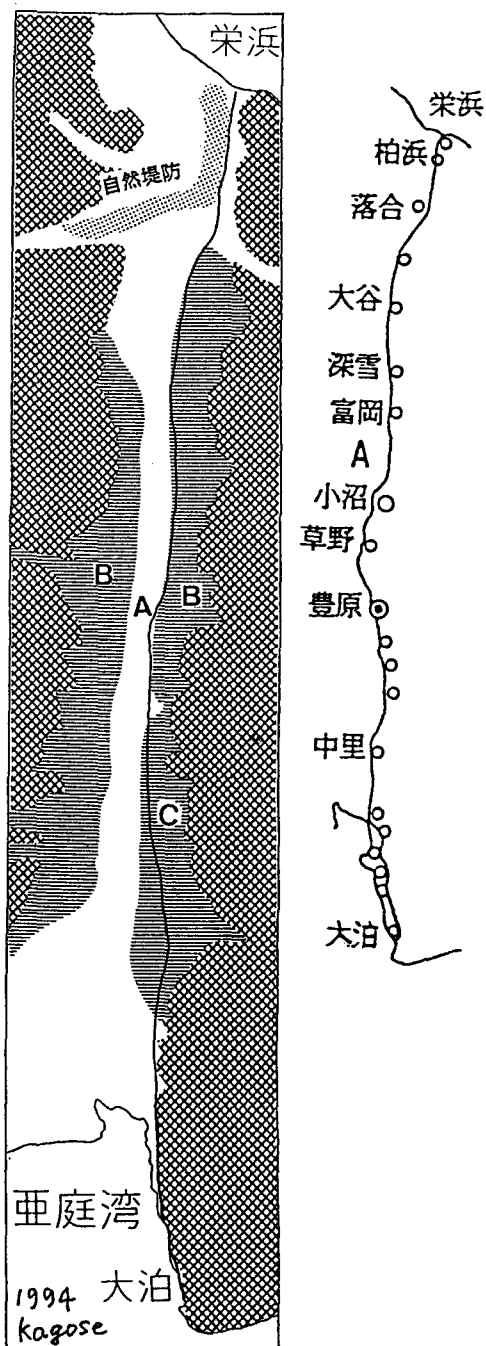


図2 チェーホフの踏査路の地形と調査地点
B：新扇状地，C：旧扇状地

建設することになる豊原についても、これは1881年に設けられ、住民91 男55 女36。戸主は36人、うち19人は牝牛の乳を搾ったりしている水呑百姓だ。27家族中、合法的なのはわずかに6組と、他の村の記載と同じ。

ここに示したのはチェーホフが準備したカード（表1）である¹⁵⁾。

囚人調査はチェーホフの主題で、どの村とも同じく詳しいのが当然で、次の数行もそれである。でもうっかり読み進むと、実話が劇に見えてきて面白い。「恋愛事件があったことがある。まず自分の女房が父親と寝ているところを発見して、手おのを振り上げて老父を殴り殺した某という百姓がいる。彼は懲役を宣告されて……」¹⁶⁾とあり、もっとすごい秘事が詳しく記されている。流刑地だから様々なのがいるし、どだい女の数が足りないのだから男女問題が起って当たり前。次の草原村の項には「ここには男69人に女はわずか5人しかいない」¹⁷⁾などと書かれている。女のいない村も多い。

チェーホフはサハリン行きの準備に刑法関係を含めていることをさきに述べたが、どの程度の大事件が起こりつつあるかを調べ上げてこの島へ渡ったのである。買物と観光中心の皮相な視察や、浅薄な読者を当て込んで旅をする低いレベルのある種の物書きと同類の作家でない。

表1 チェーホフのつくった調査カードの一例

村名	
番地	
身分	
名。父称	
名。世帯主との関係	
年齢	
宗派	
生年月日	
サハリン来島の年月日	
主な仕事	
知識程度	
内地（またはサハリン）にて妻帯か、独身か、未亡人か	
国庫から扶助を受けているか	

巻末〔注〕2に記した1994年新刊本には、107～114頁に調査カードの設問が詳記されていて、チェーホフがサハリンでなした項目がよくわかる。

チャーホフが豊原の男女や戸主の数を調べたことはさきに記したが、そのすぐあとに次のような短い文章を加えている。これは軽はずみな言葉ではない。曰く「農業植民としては、この村は北部の両管区を合わせたほどの価値を持っているが、一方、夫に従ってサハリンへきた自由な身分の者で、監獄によって汚されていない女、植民にとっては最も尊い存在である女で、ここに移住している者はわずかに一人で、それも最近夫を殺害した嫌疑で投獄されている。ドゥーエあたり北部で、役人たちから家族房に入れられて、苦しめられている自由な身分の不幸な女たちにとって、ここはどんなに願ってもない場所であろう。有角獣でも100頭以上、馬が40頭、それに草刈場も素晴らしいものがあるのに、主婦がいないのだ。つまり真の世帯というものがないのである」¹⁸⁾と。

つまりサハリンには広大な低地帯はあるが、それら全部を合わせてもこの低地帯の将来生産力にかなわない。サハリンの最南部であるうえ、互いに平行する南北方向の両山脈間の盆地、中央低地帯は内陸性気候のため夏ならば農作物や牧草を育て得る。ここを中央低地帯と呼ぶが、低地の主力は豊原のように、適度の傾斜で扇状地起原の、排水がよくて水も導入できる低位段丘、及び図3のような沖積扇状地であって、その他のサハリン全域の低地帯と全く違う。扇状地列の末端に南北走る二大河べりは最低所でツンドラと一括されるが、その他のサハリン全域の典型的なツンドラとは違う。あとは手を加え人を呼びいれればよいのだが、最高の行政官がいるアルクサンドロフスクから遠く、現状は女は少なく、男は待遇不良の囚人が中心だ。国当局は実態に目ざめてほしい。私がやって来て

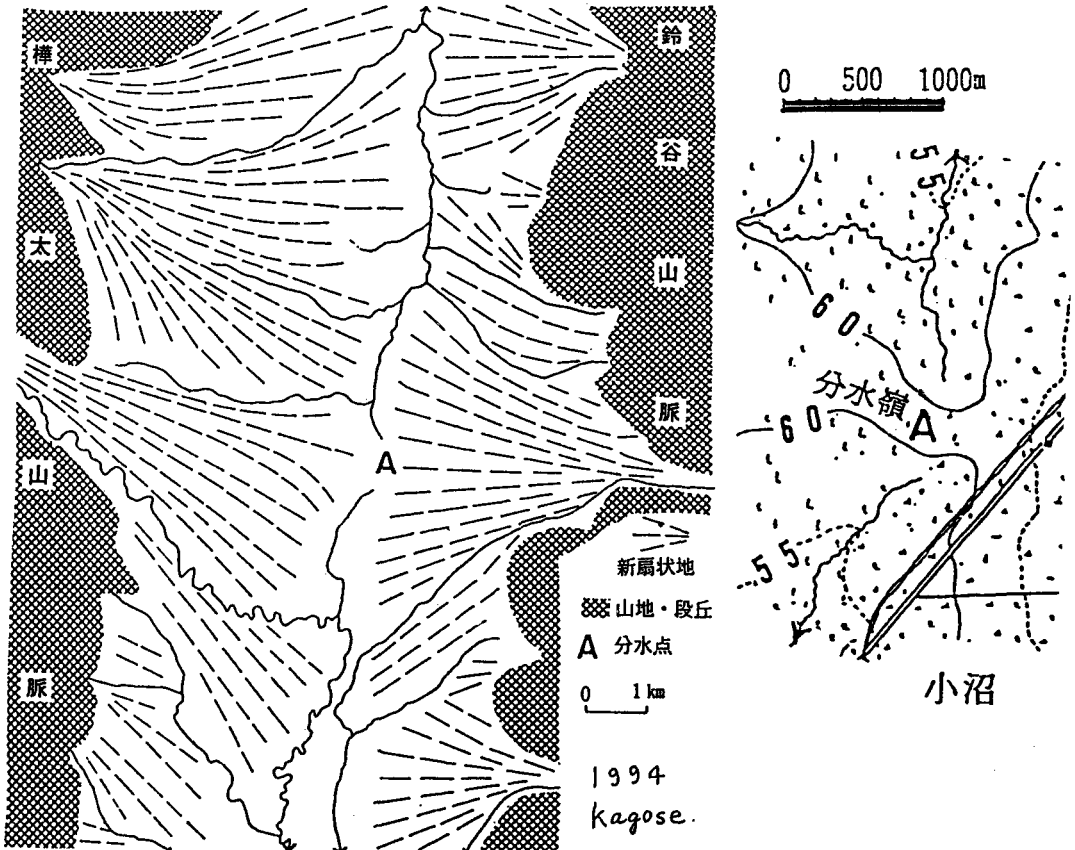


図3 チャーホフが特に注目したA点の地形 (A点の位置は図2参照)

3カ月も巡回したこと、私の日程に大泊・栄浜間の中央低地帯を入れたのは、そこを有望な土地と予断したからだ。踏査してそれが実証された。しかし土地風土の能力は人が加わってのみ発揚される。1万人以上の男と女を、中央政府へ届いている偽わりの概要書からでなく、農牧地で観察し、家の中へ入って実録をとったのだ、といっているのだ。

(2) 鈴谷・内淵両河の分水嶺A点へ地理学者と同じ手法で寄り道した真の目的

チェーホフは中央低地帯の一点Aへわざわざ立ち寄っている。そのことを『サハリン島』で見つけ、かねてA点に特別関心の深かった私はほとほと感心した。

A点についてチェーホフはこう記している、亜庭湾方向へと南流する「スーヤ河（鈴谷川）の流域はここで終わり、けわしくもなく辛うじてそれと判るほどの峠の彼方の分水嶺を越えるとナイバー河（の支流タコエ川）の流れている溪谷へ下る」¹⁹⁾というのだ。

① ここを初めて読んだとき、医学だけでなく、みごとな地理学者だと感じた。そして原文は知らないが、訳文を次のように意識してみた。南北方向を示す大泊・栄浜間の中央低地帯はときは海峡で、その後東側と西側の両山地から押し出す扇状地で埋まった。扇端の水は、南流する鈴谷川と北流するタコエ川で海へ注がれる。南流と北流の上流部が低いため、峠とか分水嶺とかの語に値いせず、単なる分水点だと。日露講和条約直後の5万分の1図からも読み取れるが、1929年の改測図（図3）の60m等高線と南流と北流の河川で一層よく分かる。

こうした谷中分水は山がちな日本列島にさえあるから、早く開けたヨーロッパなら、こうした谷中分水を運河でつないで、小船を通したのだ。人口稀薄なサハリンはその必要が、などと思いつめぐらした。それにしても、と考えた。チェーホフがやってきた1890年頃にロシアに5万分の1で5m間隔の等高線図はサハリンにはなかったらうから、どの時点でAの踏査を決意したか。

人家も囚人もいないのに、何のために？と。

② チェーホフだからA点付近も囚人らの農地や牧地に利用できないかを知ろうとしたのだ、との考えはどうだろう。そこまでは答えていないが、チェーホフがサハリン、特にこの中央低地帯へ足を延ばし、長い時間をかけたことから、当然そういう答が演繹的に出てくるのである。

おそらくチェーホフは、北緯47度付近であるから、中央低地帯の南北流べりは低湿地帯であっても、北サハリンのようなツンドラではあり得ないと半ば予測していたと思いたい。地質学・地理学の勉強に励んだ程だからだ。しかし科学者だからあいまいさを確かめにやってきたのだ。いい換えると、寒地の低湿地はすべてツンドラ帯、分水嶺と聞けば地球上どこのも高くけわしい峠と、大ざっぱに見てはいけないことを、医師としての科学眼、地理眼で見破った。

話は飛ぶが、岡田嘉子はチェーホフより47年後、越境点へ急ぐ汽車の窓で杉本良吉に叫ぶ。「豊原を出て、次の停車駅小沼の近く（A点あたり）になって、『まあ、素敵……』左右の視野が開け、白雪一色のツンドラ地帯となる」²⁰⁾チェーホフの『サハリン島』からであろうと、自ら気づいてであろうと、自書に取り入れたのは興味深い。「白雪下のツンドラ」という表現だけは気になるが、ここを著書に取り上げたことで満足したい。

A点は私も見ていないので、人をさがし回っていたら、よい人にめぐり会えた。今は東京都分寺で、生地樺太の研究に没頭している太田勝三氏の実話である。大泊中学校生徒の時、援農作業にかり出され、A点あたりで草刈をさせられた。草の生育は良くなかったこと、その南と北は低湿だったが、地元では敷香以北の低湿地と違いツンドラとは見ていないことも聞き出せた（図3）。

私は以前から、地形図と「サハリン島」の記述や地質図から谷中谷としてのA点の微地形にひかれていたが、チェーホフがA点及び南北の低湿地を住民の幸せに視点を広げていたことに気づいて少し目が開いた。チェーホフがA点ま

で行った最終の目的は囚人・住民の耕作可能性。私はチェーホフから分水点、次に可耕性を。A点・サハリン踏査は医師が投薬前にする不可欠な諸検査というべきであろう。面白く書くだけならただの作家、踏査だけならただの旅行者、賛否だけならただの政治屋である。囚人らの幸せへの行動——創造活動は出発前から報告書発表までの各段階で発揮されたはずである。

以上の述べ方はチェーホフを典型化ないし理想化しすぎて実像には遠いとおしかりを受けるかもしれない。チェーホフを知ること余りに浅いから、甘んじて受ける。でも、と一言してみたい。まれには日常性の心の底に創造へとひた向きな人、つまり理想像が実在すると思えてならない。仮像のチェーホフをそこに坐らせたまでである。

V. 医と文芸——チェーホフと鷗外

(1) 劇作家チェーホフは医師でもあった！

『サハリン島』23章でチェーホフは自らの足による調査を次のようにまとめている。徒刑囚の主な死亡要因は肺病であること、年齢では25～35歳だけで43%にも達し、45歳までを加えると70%にもなると。そして病気の要因として凶暴な気候、労役、脱走、監房禁錮など房内の騒然たる生活、食事における脂肪分の不足、郷愁を挙げている。²¹⁾

もう一例をあげる。「早くタガンローグの学校を卒業しておくれ お願いだからできるだけ早くね。わたしは待ち遠しくて 医科大学だってお前なら大丈夫」²²⁾。よく書かれるチェーホフの母親のことばである。サハリン島の調査と加えても、私の方が疑い深い性質なのか、チェーホフが医者であると始めはとても信じかねた。

信じないのは私ばかりでない。佐藤清郎も自書で「何よりも先ず自分の学問——医学を大変愛した。『サハリン島』を脱稿したチェーホフは『本妻の医学』に貢物が出来たと喜んだ」²³⁾。つぎつぎにソ連で出版されてきたにもかかわらず、《劇作家としての》チェーホフ愛好者の多い日本の読者には《医者であること》があまり知ら

れていないなどといわれると、浅薄な私は一層動揺した。

それが図らずも読んだ一文で目がさめ、医師だったことを完全に信じ始めた。「彼は原稿書きの速度を落とそうとはしなかった。テーマならこと欠かなかった。そうはいつでも近辺の村には患者が待っていて、往診にいかなければならなかった。それに近くのターレシ村の学校を指導することも引き受けていた」²⁴⁾。村の小学校で校医としての実務もやり、村人も往診する、これ以上本当の医者はない。「それだけでなく彼はルプホフ村の裁判所の首席陪審員にも任命されていたし、文学青年たちも、彼のもとに原稿を読んでほしいと頼み込んでいたし、助言を求められるとむげに断わるわけにもいかなかった。タガンローグの図書館に、もらった本や自分の買った本の包みを送っていた」²⁵⁾。生れ育った土地からじかに生えた村人、チェーホフの人間が浮びあがる。それと国の内外で名声高く、さらに遠路サハリン島を調査し、帝政ロシアに意見具申する別の姿と、みごとに結びつく。

一つだけわかるのは「チェーホフのユーモアには南ロシア的なあたたかさがある。暗い小品を書いても絶望がない。故郷の大草原と、海と、青い空の影響が濃い。北ロシア的な病的な苦悩や執拗な独断的思想は南ロシアから出たチェーホフには無縁である。風土影響を思わないわけにはいかない。チェーホフの戯曲がすべて都から遠く離れた田荘を舞台としている。田園好みは単に健康の必要からのみ来ているのではない。血管に流れている血の作用も忘れてはならない。その高度に知的な風貌の中に田舎青年の土のにおいが」²⁶⁾。

(2) 医と文の二兎か——森鷗外の場合

チェーホフは19世紀末頃のサハリン調査の有力資料として私をとらえたのだが、後にはチェーホフその人へわずかに拡散する。もとより鷗外はサハリンと直接のつながりはない。

①両人は同じ頃に生まれ、ともに医師

チェーホフは1860年ロシア南部の暖地アゾフ

海岸タンガローグ生まれ、17歳タンガローグ中学生の時最初の戯曲を発表と早熟なら、鷗外、本名森林太郎も大変な天才児で1881年20歳にして東京大学医学部始まって以来の若年で卒業、医学士となっている。チェーホフはその3年後モスクワ大学医学部を24歳で卒業していて、追いつ追われつの同時代人であるのは面白い。

チェーホフが既に劇作家として著名なさ中の30歳で、サハリンの画期的調査に燃えた1890年には、鷗外もまた年間に文芸作品52編を挙げ、文壇の師表として仰がれている。本業の医学についても同じ年に43編を発表しているだけでなく、東大卒の3年後から5年間ドイツに留学し、帰国して軍医として陸軍大学校教官を勤めている。チェーホフがサハリンを歩く1890年は、鷗外帰国の2年後である。特に兩人を出世の面で競わせる必要はさらさらないが、同じ時期に早くも認められ、医と文芸の二つ、あるいはそれ以上の世界で存分に活動したことに、何か運命的な感動が湧く。でも一人は文才で多くの名作を残して早逝する。

それに対して鷗外は多くの人名辞典に、1862～1922年、チェーホフよりはやや長寿。明治大正の小説家・評論家・翻訳家。更に本職の医師でも多くの秀れた研究業績を挙げている。1907年陸軍軍医総監、最高位の軍医となった。文芸名では強烈な文学啓蒙活動を展開して多数の名作を残した。

「彼の文学は医学から何物もマイナスしてないと思うし、彼の医学的業績は多分に文学創造の力によるものであろう」²⁷⁾。

(3) 二兎なのか一兎なのかへの疑い

これはまったく私だけの赤裸々な心境である。数多く読んだわけではないから、私のチェーホフ讚美は主として評論家の所見を通じての間接的な刺激かもしれない。もう一つは、若くして認められたことから、生き永らえた場合に達したであろうことへの推測という、大いなる未知数加わるからである。

必要から『サハリン島』を手にしたとき、正

直なところ当惑した。医師で(も)あったと知ただけでなく、まさにそのために読み進んだのだが、地理学の面でぴかりと輝く部分が見出されたからである。囚人を別表のように対面調査する実行力を支えたものが何だったのか、私は少なからず動揺した。偉大な劇作家本人がサハリンを調べ、「これが我が本妻」と記すからでもある。では戯曲は何号なのかといふかった。戯曲や小説こそ本妻と信じ、『サハリン島』は小説の一冊と、読む前は決めていたが、見事な実記であった。

鷗外の場合は明白であって、医と文芸の二足のわらじと考える必要すらなかった。医者が本業の片手間に作家めいたことへ手を出すのを、もともと頭がいいからと了解できるケースを知っていたからである。鷗外の場合は他事に手を出せない(はずの)軍医であり、それも上官からに生まれながら最小限の勤務で済ませる程度ではなく、軍医として最高の位階にあることが誰にも知られていたから、文芸の方が二号にきまっていると見てとれたが、それは誤解だった。一号、二号は単なる比喩だから、それでは医と文芸を何がどのようにつないでいるのかという大きな疑問が残った。

そうした状態は二足のわらじといわず、通常は二兎というようだが、考えてみるとそれもよくわからない表現だ。医なる兎と文芸なる兎は互いにはつながらないからだ。二兎を追えば、一兎だけつかまるか、または一兎もつかまらない。二兎といっても兎同士には自発的なつながりはない。そりを引く二頭の犬ならわかる。犬同士は無関係だが、御者から2本の綱が延びている。

それと同じで、医と文芸は別々にも成り立つ。医をやれば必然的に文芸が芽生える、文芸は医を引っぱり込むのではなく、二頭の犬が御者との間の別々の綱でつながり、見掛け上二兎を追うように見えるのだという見方である。

そうだとすれば、そりの行方を決めるのは御者であって、犬同士の相談でないように、貧しい患者に心を寄せる同じ心でさまざまな相談に

応じ、心が大きく燃えればサハリンまで苦しい旅をし、同じ心境を友に便りして、興味をそがない程度に戯曲にもにじませることもなろう。杓子定規はかえって有害無益だが、まともな人間なら、自己の習性・趣味・思想・信条に従い、結果的にそうなるはずだ。このことについては総合・理想・創造などと銘打って、あとで再度駄言を述べたい。

ところで医師でなく、一般の科学と文芸の関係はどう見たらよいだろうか。

その前に、最近私が感動を新たにした文学地理学者小林高樹こうじ氏の名を挙げておきたい。直接読んだのは数点だが、そのうち高村光太郎の『地理の書』に関する深く広い解説は“すごい”論文だった²⁸⁾。

私にも多少わかる部分を例示すると、光太郎が「山も河も岸邊も野原も 入念に刻まれ叮嚀に仕上げられ」の第4連は、地理学・地形学・地質学について十全の実力を持つ小林によって、「氾濫すれば広い水面と化してしまう。やがて自然堤防が長くつらなり、その背面には水生植物が繁り、ときに稲がつくられているバックマーシュがひろがって……」と2頁にも及ぶ精細な解説に発展する。

このようにやさしい説明もあれば、ナウマンによる日本列島の地質区分図や岡山俊雄力作の中部日本の地形構造図に語らせる。それが光太郎にも勝る名文で貫かれている。北海道の風土と文芸を考察した別篇では土地名・年月日も加えている。風土と文芸の関連が如実に胸をゆすぶる²⁹⁾。

VI. 漱石にひかれた寅彦

(1) 「客観としての対象」と「われ中心の対象」

チェーホフがサハリンで成し遂げた行動の最終目的、囚人およびそこに住むほかなかった幸せ少ない人々への熱い想いとして感動した。その限りにおいて、同じ頃に生まれ、同じく医と文芸の双方に精進した、ただしサハリンとは無関係な森鷗外をも少し調べたのだった。

それならば同じ文芸と、医学ではないが同族の自然科学の双方に心を燃やした多くの人についても触れてみたい、そうした意図で寅彦と宇吉郎に登場願った。

(2) 出会いについて

まず寅彦について思うのは、人間の出会いの不思議さと、出会いの結果に続けてすなおに実行してゆく、こだわりなどのない積極性である。寅彦は若くして物理学の分野で輝かしい研究業績をあげるのだが、そのきっかけをつかみ得たのは、旧制五高で田丸卓郎教授から自然科学への眼を開かれたこと。次いで東京大学物理学科卒業、ドイツ留学、1916年東大教授。実験物理学・地球物理学その他で極めてユニークな業績を挙げることへとつづく。

生地は高知。当時は山陽本線まで船で到達、五高のある熊本へは大変な遠回りだったが、入学してみると夏目漱石が英語の教授だった。早速自宅を訪ね、俳句の教えを受けるようになる。二人には後々まで師弟の間柄が続き、一流の随筆家に成長する。しかし漱石がいることを知ってではなく、熊本の土地柄を愛した父親の言に従ったためという。

自然を相手とする科学者にも、出会いと人脈があっておかしくはない。「寅彦は漱石から『自然の美しさを自分自身の眼で発見すること』を教わった³⁰⁾という。別の資料によると漱石はある日東大へ寅彦を訪ね、作業中の実験室に長時間足を留めたこともあったという。物理学にも関心が深かったのである。

私は18歳頃久米正雄の半ば実録の『破船』を図書館で借り出した。その中にあったと思うが、その時は松岡譲や芥川龍之介に気をとられ、漱石が毎週開く会合に寅彦も常連として顔を出し、文学青年達の話に耳を傾けるとともに、自らも新鮮な話題を提供したこと、漱石がそれを文にしたことなどは知らなかった。漱石の影響が自然科学者にまで及んでいたとは、うかつにも私はずっと後まで気づかなかった。「教わった」とあるが、すぐれていたこの人達は自分で汲みとっ

たし、漱石も若い人達から汲みとった。

漱石が1916年12月9日早稲田南町の自宅で亡くなったとき、寅彦は「夏目先生が亡くなられてからもうどこへも遊びに行くところがなくなりました。20年間の生涯から夏目先生を引き去ったと考えると、残ったものは木か石のようなもの、先生そのものが貴重でありました」³¹⁾と、友人の物理学者へ書き送っている。ついでに記すと、その一年前、「漱石を訪れた寅彦はこのときすでに、“夢見る芸術家”アインシュタインが奏でる科学理論の味わい方を、漱石に向かって楽しげに語っていたかも知れないという」³²⁾。

(3) 客観としての対象・物自体の統合性

以下多少のページをさいてこのことを述べる。寅彦はベルリン大学地理教室で聞いたペック(当時最高峰の地形学者)の講義は「平明で、しかも興味があり、示唆に富んだ立派な講義であると思われた」ので、二学年を通じて聴講している³³⁾。

それにしても、実験物理学の若い東大助教授が地形の地理学にまでなげゆえに手を広げたか。その謎は後に発表して学士院恩賜賞を受ける、X線による結晶構造解析の独創的な業績、あるいはA. ウェゲナーの大陸移動説を取入れた日本海形成論などで明白になる。学問の前進には物理学と関連する諸分野、例えばペック地形学も必要と洞察したからに相違ない。自然現象はよくいわれるように、もともと総合体であるのを、研究上の便宜、能率化、長い慣習、個人性など人間側の都合により、縦割りを続けてきた点が多いと見てよい。

明敏、多感な若き日の寅彦(1878~1935年、ドイツ留学は1909~1911年)は、チェーホフ(1860~1904年)のサハリン行き(1890年)とともに、地理学を含めた必要な学問をあらかじめマスターしたわけで、先覚者にふさわしい態度といえよう。

かねて人柄をも尊敬してきた山川民夫東大名誉教授は東大医学科卒業後、研究テーマに関連して化学・生物学に及ぶ広範な科学分野の上に

生化学に関する金字塔を打立て、学者最高の榮譽である日本学士院会員に列せられている。その大祝賀会における謝辞はあくまでも謙虚・簡潔・明朗。祝辞もまた同博士を知悉し尽くした高名な人士とあって、楽しくなごやかなうちに率直なことばで博士の真実を述べられた。私は祝宴終了の一瞬まで、かたずをのんで心地よい陶酔の中にいた。事実だけが発揚する劇ならぬ完璧の素敵な情景だった。寅彦全集の「真実なる記録はすべて芸術である」³⁴⁾の一文に合せ、これまでに知り得た山川博士の人生コースを推し測り、チェーホフ・寅彦とともに感動を新たにしたのである。

(4) 寅彦の科学・芸術両世界の近親観

寅彦に詳しい太田文平は寅彦自身の記事から「第三者の立場から見れば、この二つの階級は存外に近い肉親の間柄であるように思われて来るのである。夏目漱石先生がかつて科学者と芸術家とは、その職業と嗜好を完全に一致させようという点において共通なものであるという意味の講演をされた事があると記憶している」という部分を摘出している。

寅彦の意識の中核には常に漱石の存在があったのであり、漱石が寅彦の内部に深く介在していた³⁵⁾と付言している。

太田はまた、寅彦の視野は広いとした上で、社会科学畑の人ばかりの統計学会員の中に寅彦が入っていた、というある会員の記事を引いている。なお太田は、寅彦は映画に親しんだとも記しているが、当時の思想界をリードしていたマルキシズム風の映画には好感を持たなかったようだと記している。映画について寅彦は、一番面白いのは写実ものである。こしらえたものは、どこかに充実しない、ごまかし切れない空虚があると主張した、と。しかし太田が紹介している次の部分は、寅彦が並みのレベルの科学と芸術には大きな違いがあると見ている点で、私にものみこめる。

実物を見たのでは到底発見することの出来ないものを発見させるところに映画の特徴がある

のではない。すでにあるものの複製ではなく、むしろ現実にはないものを創造するものでなければならないという主張にはきわめて含蓄があると思われる。

つまり、寅彦が科学と芸術は近いと考えるからこそ、映画批評家としての位置が、職業的批評家の間に伍して第一流に数えられ、燦然と光を放っていたのだと太田はつけ加えている。³⁶⁾

Ⅶ. 雪氷ひとすじの宇吉郎

(1) 寅彦から宇吉郎へ

中谷宇吉郎(1900～1962年)という偉人にきっちり2時間札幌の御自宅の書斎でお話を伺ったことがある。後日よく考えると大変なこと、もったいない幸運だった。既に述べた北海道での講演と天塩川の調査のために学期半ばの長い休講を申し出たところ、「あなたは大学を10日近くも休んで研究に行くのだから、私が北大で物理学を教わった中谷先生に会ってこい」と、いつも面倒見のいい上司、松倉恒夫横浜市立大文学部部長(後に学長)から、紹介状とは別に札幌へ電話をいただいたとき、正直いって雪氷学者から何が得られるのかといぶかった。

でも訪ねてみたら、あの著名な宇吉郎が、信頼する愛弟子の願いを容れて初対面の私を待っていた。やさしい語り口ながら無駄話は全くなく、きっちり研究のことだけを細かに話して下さった。一つを挙げると、終戦直後で物のない中、石狩川上流部の広い深雪斜面の積雪・融雪を、一地点でなく、場所的小差まで精細に調べあげた。その時は大型の缶詰かんを多数使うという独特の方法を考えたのが成功につながった、など楽しそうに淡々と打ち明けられた。研究機材があれば完璧を期し、なければ工夫してといった、非凡な着想に打たれた。

その折り、このような話もされた。東大卒業直後寅彦の指導を厚く受けた。最初に坐らされたのは何もない大机一つだけで、好きなことをやれとでもいう形に、はじめはとまどったという。その他有益な話をたくさん伺い、お訪ねしてよかったと思った。そして松倉学部長が私を

宇吉郎のもとへ行かせた真意もはっきりつかめて感謝した(松倉さんは1994年9月逝去)。

昭和30年代前半頃は今の横浜市と違って貧しく、大学の設備に不満な教授が多いのを、温厚で熱心な学部長は悩んでいたこと、そのさなか宇吉郎からじかに、創意工夫の楽しさ、面白さを心やさしく教えていただけたことを、しみじみと回想するのである。

改めて宇吉郎全集や研究者の書いた人物評論を読むと、この人らしいユニークさがにじみ出ている。1900年石川県生まれ。東大物理学科の学生となって以来一貫して寅彦に傾倒、卒業後2年間イギリスで研究。1930年帰国したが東京にはとどまらず、雪と氷を研究するために北海道大学助教授となり2年で教授。天然雪結晶の分類と人工雪生成その他の独創的な研究で1941年、若くして帝国学士院賞を得るなど高い成果を挙げつつ北大から動かなかった。私がお訪ねした1961年5月は逝去の前年だったと気づき、感慨がひとしお深い。

大学者宇吉郎にはまたユニークな随筆書も多い。単なる科学啓蒙文の域を出た、科学と文芸の両面を内包していて、今もおな一般人・専門学者の双方から愛読されている。

(2) 科学の指導と応用

寅彦にしても宇吉郎にしても大学教授であるから、もとより預っている学生を教えることが本務であり、かつ自己の研究成果はこの世に役立つべきであるといえる。しかしこの二人の例からみると、そう単純に進むものでもないし、進めることが良い結果になるとは限らない。

寅彦は大机までつれてゆき、あと水を飲むのは馬だとばかりに宇吉郎自身に期待した。宇吉郎は教え子ではない、自由学園の数名の女子生徒が共同で行った霜の観察や実験をまとめたものを指導教師を通じて読まされたらしいが、それについて次のような感想を書き、自著で紹介までしている。「実験は充分ではないが、余りとられずに先に進んでいるところも、如何にもこの人たちの自由な気分が見えて、私には面白

かった。予期せぬ不思議な現象に当たったら、それを逃がさぬようにすることが研究の内容を豊富にする一つのこつである……この研究を読んで私は非常に驚いたのである」³⁷⁾と、暖かい激励と指導を加えている。純粋な興味を持つこと、二月仙石原で徹夜したほどの興味、思いついたことを直ぐ試みたこと、偶然の現象を見逃がさぬこと、新しい領域のことを怖がらずにやること、最後に妙にこだわらぬことを挙げている。中谷宇吉郎は寅彦同様、若い可能性を引出す素敵な教師といってよい。

(3) 研究成果が社会に役立つように

33年前にお伺いしたときは、野外観察や実験のことを、楽しく話されたが、残された諸書や第三者の評論に目を通すと、研究成果がさまざまな場面で役立っていることの多いのに驚く。宇吉郎の場合、雪の結晶など、世界の学者が誰も成し遂げ得ないレベルに高めるために、どんなに苦しい経過を味わったかと推測するが、直接伺ったときも、活字にもそれはなくて、喜びと満足だけにひたっているように見える。美しさと喜びこそがすべてであり、それが課題のゴールだと信じていた。だからこういうことばにもなる。

「寅彦は漱石から自然の美しさを自分自身の眼で見発することを教わった。宇吉郎は寅彦からものの深い奥底にかくされた造化の秘密には不思議な美しさがある」³⁸⁾。

そうとすると宇吉郎の場合、美しいものを求め、楽しさに満足したことが、そのまま現実社会に役立ったのだということになる。石狩川支流の源流急斜面での観察がそのまま、水力発電量の推測・確定に貢献し、雪氷の研究が列車運行の安全向上に活用されたのである。

さきに触れたチェーホフの場合も変わらない。流刑植民地の改善と、人の行きたがらない遠い島を知る喜びとは、内容的にひとつならぬの各部分なのだ。大きな意味ではわが本心に忠実であり、より多くの人を愛し、一見到達し難い対象へと理想を追ったのだ。

宇吉郎はより端的に表現している。「面白かったということだけで充分。事実の羅列の面白さの中に美を求めるようにしなくてはならない。面白さの美に客観性を与えるためには自然現象に対する疑問の出し方とその追求の方法とそれで得られた知識とを報告すれば良いとした」³⁹⁾。

対象そのものが明確になれば、社会がそれを活用できるということになる。

VIII. 総合と創造

(1) 人間の意志と無関係な総合と、意志が核となる総合

①人間の意志と無関係な総合

大洋に棲むさまざまな生物は、人間の意志によってではなく、それぞれの習性により生き続け、特有の生態系を保っている。奥地の生物・無生物についてもほぼ同じである。それら人間の意志と無関係な総合、客観としての総合あるいは対象といって見たい。

但しそれは人間がそこにいないからではない。人間の存否にかかわりないとする見方である。

次項では、人間の意志が核となる場合を比喻を用いて私見を述べてみる。比喻の常として、疑問が見事に解けたと感じても、再読すると的を射てはいないことは残念ながら致し方がない。的が射られるのだったら、比喻という中間形はとらない、と開き直ろう。

②人間の意志が核となる総合——比喻で考える

御者とつながった二頭、これはあまり好ましくはない比喻だが、科学なる一頭と芸術なる別種の（この語は特に不満不正確）犬が並んで走ると仮定する。二頭が互いに談合するからでなく、少し長くした綱で御者が、その上から舵をとっているわけだ。科学の犬と芸術の犬は、並走してまるで一頭に見えても別々の二頭であるし、二頭として勝手に走っているように見えても、御者を通じて間接にだが、スピード・方向が揃うのだ。

ということは、科学と芸術は二頭の犬だから、もとより別物だが、同じ御者でひとつのところ

を旨とす。というよりも、御者と二頭の三者は一つなのだ。つまり一人の人が科学と芸術の二つを使い分けているのではなく、より良いもの、新しいものを一つの心で旨とするのである。

以上は、そうありたいと望んだ場合の科学と芸術の総合体である。この形は、二頭の犬の直接関係でなく、引き綱を通じての間接関係であり、総合には核があって、核の中心は犬ではなく（理想と意欲にみちた）人間である。

このように表現してみても、強調できたのは、意図を持った御者の綱が活動してのみ総合であり、すべての犬がたまたま集合した情景でないということだけだ。そして明らかに出来なかったのは、科学と芸術の二つを何にたとえたらよいか、少なくとも二匹の兎でも、（異種と但し書きを付加しただけの）犬でもない。動物名などではなく、適切で美しいことばが待たれる。

(2) 創造

小論の目的は、今はたやすくは細部まで見届け難い帝政ロシア時サハリンの地事情の一端を、チェーホフの作品から抽出すること。そして同様の願いを、より困難な時代・場所にも、文芸を含めての諸事から抜き出せるかを考えることという主旨で、それは既述の通りである。

①かりに宇吉郎の頭の書庫から引出してみる

宇吉郎の書庫になぜ、かつどのようになくさん詰まっているのか。そもそも宇吉郎はどんな書庫を目指して生きたのか。雪の結晶の写真や写生に驚く人、魚の素敵な絵に感動する人、随筆といわれる実は身を削る思いで書いたらう着想からヒントをつかんだ人、雪氷の調べ物から鉄道事故あるいは発電用水へ応用した人、さらに日本学士院賞という形を見て偉大さに気づいた人、もとより宇吉郎の書庫に、見えるにせよ、見えない形にせよ入っていたものだ。

引き出したのは、別々の目的を持った第三者である。もしそれら第三者全員が、入手した物を持ち寄ったとしたら、その豊富さ、多面さに感じ入りつつも、宇吉郎は何が専門なのかという声を発する者もあろう。既に触れたように宇

吉郎がそれまで通り越したのはすべて「創造」という駅であり、私に2時間も聞かせた61歳の宇吉郎もそのことを心を込めて楽しく語ったのだった。翌年亡くなっていなかったら、もっと向こうの創造駅へ、あのひた向きの目を向け続けたことであろう。

そもそも専門とは自分の内なる第三者が、世俗的な必要から名付けただけのことで、通常は一つだが、それが一つであるか二つ以上であるかで、人としての優劣を区別できない。雪氷学者といわれようと、随筆家でもありといわれようと一向にかまわない。左右に窓があるものを、無理に片方をカーテンで暗くすることをしなかったままである。心はいつもこれから展開するはずの未見の窓、「創造」だったと答えそうな気がする。寅彦自身は、おそらく誰でもそういうはずだ、と暖かいことばを加えるだろう。

それに対し、私自身はむしろ冷たいことばを一つだけ加えたい。自分ではその通りであっても、第三者から見れば創造に成功した人は少ない。あるいは、創造とはうらはらな方向を旨としている、金もうけなどで終わっている。それを区別する必要がある。但し学士院賞をはじめ多くの賞を得た人、それは素晴らしいことである。二つの成果を挙げた人、多才な人、器用な人などをそれぞれ評価するにやぶさかでない。

②傑出した事業家でもあった小椋佳に仮託して

最近ようやく共感が持てるようになったが、恥ずかしいことに私は職業についての平等意識が欠けていた。田舎から出奔して新聞配達をしていたとき、その月の集金に行ったら徳田秋声が出てきてお金を渡してくれた。当たり前の事が私にはひどいショックだったので、図書館で調べたら作品をたくさん書いていて、これまでも名前だけは知っていた作家だった。ショックというのは、雲の上の人と信じていた人が、普通の身なりで普通の顔でお金などをいじったからだ。見てはならないものを見てしまったようで、強く心に残った。

話は飛ぶが、よく知られた作詞作曲家の小椋

佳が、大変すぐれた偉い銀行家だと知った日から、私の思いは一変した。銀行の方は適当にさぼりながらの下っばと思いついでいた頃は好きだったのに。二兎とも成功していそうなのが許せなかった。同様な人は皆嫌いだった。既述の軍医森鷗外にも同じ思いをしていた。

以上の考え方を反転させたもの、それはチェーホフであり、サハリン島への関心に因る。小椋佳についての知識はほとんどなく、これは見方だけだが、出世だけした並みの銀行家でなかったことを、チェーホフを通じてわかってきた。銀行内である運動部を指導したとき、あるいは銀行での新しい商品を考察するときの小椋は作詞作曲同様に創造的で、銀行側の評価も高かったという。問題は一事・二事の別にでなく、前向きに全力投球すること、つまり創造的か否かである。いうは易く、至難なわざである。

(3) 創造することの困難

①創造的思考と創造的人格

創造的思考は「想像と思考の両方の働きが統合されたものとして見ることができる。想像でイメージをつくり出し」思考するのであるが、大切なのは「新しい価値あるもの、またはアイデアをつくり出す能力(創造力)、及びそれを基礎づける人格特性(創造的人格)である。」「創造的人格は創造的態度としてとらえることができる。創造的態度は、創造的人格の特性を分析することによって究明できる。創造的態度としては、自主性(自発性、主体性、自律性)、衝動性(心的エネルギーの強さ)、固執性(心的エネルギーの持続性)、探究心(知的好奇心)、開放性(柔軟性、多様性、あいまいさの寛容性)、注意集中力、自己統制力などが挙げられる。以上のことから、創造性は創造力とそれを基礎づける創造的人格の総合概念」⁴⁰⁾といえる。

やや長い引用文中、心を強く捉えるのはあいまいさの寛容性である。あいまいでなくて初めから明白なら、そもそも再考する必要も創造への工夫努力も要らないし、魅力もない。明日が今日と同じ、隣地がここと同じ、しかもそれが

確実であれば、はずれる、あるいは迷うなどの不安や苦痛がない代わりに、それを克服した者のみが心から味わえる深い喜びはない。

何にしても創造的思考には「新しい事態、課題解決場面に遭遇した時、課題解決に対する考えや仮説を持ち、それを検証するため、従来なかった解決方法、手段によって独創的に解決」することが必要であるだけでなく、創造的思考には「生み出したものの価値的水準の高さが問われる」という当然の使命があるから、不安に楽しみが随伴する⁴¹⁾。

②創造的な人に危惧は伴わないか

創造は前進・急速・改革などと同義語ではないが、平凡や安定とは一部背中合わせでもあるから、さまざまに評定される。例えばこういう見方もある。

「精神異常と創造活動との関係について……創造的な人は、心理学的なカタワでもなければ、破滅へ向かう者でもなく、特別に、深く、広く、柔軟な自我意識をもっている……創造的な人は平均的な人に比べて、より原始的であると同時に文化的であり、いささか狂気であると同時にはるかに正気である……創造的な人に見出される思考の新しさは、おそらく部分的には既成文化の強要に対する抵抗であろう……そのために道徳的な態度が減退するというわけではないが、ときには伝統的な道徳の拒否ともなる」⁴²⁾。

そのほかさまざまな意見に接すると、創造の見方はもとより、理想を旨とする速度や成功率(失敗率)だけを考えても違いはあるはずで、単純過ぎる考え方は危険である。

IX. 補足と摘録

(1) 『あいまいさ』補記

岩波の広辞苑、東京堂の類語辞典などの普通の辞典から拾うと、あいまいさとは不定・不確か・不分明などにまとめ得るが、一步突っ込むと使用の目的・意図などによる大差も見逃せない。

①大江健三郎の「日本」観「あいまいさ」観
大江は1994年12月7日ストックホルムのノー

ベル賞受賞記念講演で「国内と周辺諸国の人間の正気を踏みにじった歴史を持つ国の人間として、(中略)私は川端(康成)と声をあわせて『美しい日本の私』ということはできません(中略)『あいまいな日本の私』⁴³⁾というほかにない」と述べている。⁴³⁾

②佐伯啓思京都大学教授の論文

『戦後民主主義』の擁護者を自ら任ずる大江が、この『あいまいさ』を否定的に捕えている……問題はこの戦後日本的な『あいまいさ』の原因が、日本の『前近代性』を温存したことによると見ることの妥当性である⁴⁴⁾と。賛否は両書から直接引出して頂ければ幸いである。

③「あいまい」と「ファジィ」を同視し、かつ肯定的に捉える理工系学者などの諸例

水本雅晴大阪電気通信大学工学部教授は「人間の思考力が感性、あいまいさ、嗜好、予感など多分に情緒的な面を含むのに対し、機械の思考はそれらを含まず純理論的である……あいまいなまま理解し、あいまいな形で思考・判断する⁴⁵⁾という。

向殿政男明治大学工学部教授は説述する。「究明しようと思っても究明できないあいまいなものが存在する……世の中のこと……あいまいなことばかり」「明確ということの反対があいまい」「科学の中にあいまいを持ち込んだら……総すかんを食う……科学技術というのは明確にしていくのが当たり前」でも「私は……あいまいが好き……ファジィというのが大変好き……日本語ではあいまいと訳され」と明快である。⁴⁶⁾さらに向殿は講座題名そのものを「ファジィ理論とあいまいさの効用⁴⁷⁾とした上、「科学技術の分野でもあいまいさの効用がちゃんとある」と強調、「あいまいだからこそ誤解ができて、誤解ができるからこそいいヒントを得て創造性が出てくる……実社会であいまいさというのはかなり重要な役割を果たしている」と⁴⁸⁾。向殿は別書で「身のまわりの不確かさには……蓋然性、多義性、不正確性、不完全性、曖昧性」があると指摘している。⁴⁹⁾

④「あいまいさ」を生かすエンプソン

著書『曖昧の七つの型』は高級・精細・難解な専門書と思われるが、書名どおりの7つの曖昧型が、有難いことに、章別に要約⁵⁰⁾してあるため、大意はほぼ把握できる。著者エンプソン William Empson (1906—84) は「文学作品中にある一つの単語、表現のなかに二つ以上の意味を読みとった場合、それをいずれか一方を正しいものとして他を切り捨ててしまわず、その重層的な意味こそ作品の本質であると主張した。こいした意味の重層性、〈曖昧さ〉に積極的な価値を見いだす立場は、文学作品を平板な読み方から救う⁵¹⁾という。③で挙げた、コンピュータを有力な武器とする理工系学者群とは、ある面で異質でありながらも相通じていることに興味が持たれる。

以上に挙げた②～④などの「あいまい」をそのままチェーホフ・寅彦・宇吉郎その他の「創造」などの理解に直結できるといい切れないが、間接につなげることは可能である。「あいまい」を単純に非難語として無視または有害視するよりも、捨て難い、または好ましい言葉の一つとして顧みたい。既述の恩田は創造的態度の一つに開放性を挙げているが、()内の三つは互いに別物でなく、“多様性を特徴とするあいまいさをも柔軟に顧慮するという開放的な態度”を説明しているものと解したい。³⁸⁾

(2) 地理と地理以外との相似と相違

①万象に「大差から相似まで」あること

双生児を瓜二つと見るのは通り一辺の目。綿密に時間をかけると二人の違いが見えてくる。“一帯は似た土地”と括り易いが、綿密に心眼を注ぎ続けるうち瓜二つと割切れなくなる。指紋鑑定成立の根拠は個別性である。

②わけても地理(学)が地域間の共通面たる「群」で止め、微差までの細分を怠れば、「地域特有の指紋」を取りこぼしたことになる。チェーホフは多様なロシアの中のサハリンなる指紋を我が目で確認し、書で訴えた。

③はたからは苦行のはずが、例えば宇吉郎は楽しさの成果に高め、図らずしも人を愛し、社

会に貢献し続けていたのだ。

それでは地理(学)とほぼ共通であるか。然り。でも分担はある。“瓜二つ”などと括り過ぎないことが不可欠の分担である。

(3) 摘録

①モスクワ出発からのすべてが創造的行動

チェーホフは、低地帯の平らな分水嶺即ち地形の観察に次ぎ、土地利用なる地理へ高め、更に囚人・住民の幸せへと視点を向上させた。帰国後、作品「サハリン島」で流刑植民地の窮状を克明に披瀝する。科学(医)、地理、芸術(作品)、行動(訴え)は各段での創造的行為として注目したい。そもそもモスクワからサハリンまでの80日にしても、胸を患うチェーホフにとっては冒険だった。危険と不安を燃えるような意欲で乗り越えて、苦難を喜びに転化させた各段階もそれぞれが創造だった。

②鷗外・寅彦・宇吉郎らの業績を利用する側が科学・文芸の二兎の成功者として高く評価するが、当人は単に何を選ぶかだけでなく、どこまで高めるか創造するかに掛ける。それへの努力、困難と失敗、なしとげた満足と喜びである。意欲はそこで終わりはしない、もっと高く困難な道が遠くに明滅する。

第三者はその成果を偉業として賞賛するが、創造の度合いに付いていけない凡庸または手堅い人からは、時には既成文化や道徳への反抗とも受け取られる。しかし思想信条そのものに片寄っていないことに気付いた良識者は不安を感じない。もともと珍奇や軽薄な思いつきだけでことは成就しないのだから。

③創造の語を考え直してみる。

片舷張らずに述べてみると、創造とは初めて造る、新しく造る、棒高飛びのように一段高めるなどでいいではないか。中国で聞いたと若い友人が「更上一層楼」という語を教えてくれた。これも創造だと解したい。

それには既知のレベルを知悉するという面倒がある。失敗を恐れず嘆かず、うまくゆけば自分がまず喜ばばよい。それとは別に成果の価値

は他人が決める。

創造にはさまざまな度合いがあるに決まっている。下半身がなお保守の水中に留まりながら両腕を思いきり高く伸ばす程度のものだって認めてほしい。

④「あいまい」は人によってさまざまに使われる。イ.普通は軽い非難語として。ロ。「あいまいな日本」となると、軽くない表現力に変化、読者による賛否両論が起こる。ハ.理工系などの学者であいまいをファジィと同義に解する場合は、特に非難などはしていない。ニ.あいまいなことこそ、夢追う心をかき立てて行動させる刺激的な素材であり、解け切れぬ道すがらの謎でもあることを忘れてたくない。チェーホフはサハリン受刑者を訪ね、あいまいな現実に入りしたのだった。

〔注〕

1) Anton Pavlovich Chekhov 1860~1904 ロシアの小説家、劇作家。

2) チェーホフ(1893):『サハリン島』で、使用訳本は主として中村融訳(1953):『サハリン島 上巻・下巻』岩波書店。本小論はこれに拠る。

しかしチェーホフ著『サハリン島』の邦訳は抄訳・全訳とも上記の岩波書店版のほかにもある。神西清・原卓也共訳(1961):『チェーホフ全集 13巻』は、『シベリアの旅』『サハリン島』の全訳を収めている。

太宰俊夫抄訳(1939):『サガレン紀行抄』樺太庁、も見逃せない。『樺太風土記』(国書刊行会、1984年刊)は、長年樺太に住みながらチェーホフの道を追った玉貫光一の著書。

ちくま書房から1994年9月に刊行された松下裕訳『チェーホフ全集 12巻 シベリアの旅とサハリン島』は最新の訳本である。

3) 籠瀬良明(1972):天塩川下流平野の微地形と土地利用に機能した地形の属性、地理学評論、45。

4) B判の多色図なのでここにはのせられない。全部英文で樺太島を10面におさめる(25万分の1)。編集者名はYasuo Sasa(佐々保雄)とあるが、発行所名・国名とも無記入。1960年発行。

5) 佐藤清郎(1966):『チェーホフの生涯』筑摩書

- 房, 62頁。この訳書は重要文献と考える。
- 6) 前掲5), 224頁。
 - 7) 前掲5), 223頁。
 - 8) 前掲5), 227頁。
 - 9) 前掲2), 上巻40頁。
 - 10) 前掲2), 上巻248頁。
 - 11) 前掲2), 下巻237~238頁。
 - 12) 前掲2), 上巻246頁。
 - 13) 前掲2), 上巻266頁。
 - 14) 前掲2), 上巻266頁。
 - 15) 前掲5), 236頁。
 - 16) 前掲2), 上巻278頁。
 - 17) 前掲2), 上巻280頁。
 - 18) 前掲2), 上巻277頁。
 - 19) 前掲2), 上巻281頁。
 - 20) 升本喜年(1993):『女優岡田嘉子』KK文芸春秋, 119頁。新しいだけでなく、内容もすぐれている。
 - 21) 前掲2), 下巻222頁。
 - 22) F・トリオレ著, 川俣晃自訳(1955):『チェーホフ その生涯と作品』岩波書店, 24頁。
 - 23) 前掲5), 97・463頁。
 - 24) アンリ・トロワイヤ著, 村上香住子訳(1987):『チェーホフ伝』中央公論社, 183~184頁。
 - 25) 前掲24), 183~184頁。
 - 26) 前掲5), 6頁, 186頁。
 - 27) 河村敬吉(1969):『森鷗外の研究』清水弘水堂書房, 93頁。
 - 28) 小林高樹(1994):「地理の書」におけるFüdogyの成立, 駒沢地理, 第30号, 143~163頁。
 - 29) 小林高樹(1986・1987):北海道の風土と文芸についての考察(一)(二), 秋草学園短期大学紀要, 第3号, 1~35頁。
 - 30) 太田文平(1990):『寺田寅彦』新潮社, 241頁。
 - 31) 小出廉太(1992):『漱石が見た物理学』中央公論社, 178頁。
 - 32) 前掲31), 177頁。
 - 33) 寺田寅彦(1960~1961):『寺田寅彦全集』岩波書店, 第9巻239頁。
 - 34) 前掲33), 第8巻36頁。
 - 35) 前掲30), 147頁, 260~263頁。
 - 36) 前掲30), 147頁, 260~263頁。
 - 37) 樋口敬二編(1988):『中谷宇吉郎随筆集』岩波書店, 38~41頁。
 - 38) 前掲30), 241頁。
 - 39) 前掲37), 300~301頁。
 - 40) 恩田 彰(1971):『創造性の研究』恒星社厚生閣。序論, 33~35頁, 159~162頁。
恩田 彰(1971):創造性(依田 新『新・新教育学事典』金子書房, 521~522頁。
 - 41) 岸本 弘・滝沢武久(1984):『教育心理学用語辞典』学文社, 119頁。
 - 42) フランク・B・ギブニー(1974):『ブリタニカ国際大百科事典』KKティビーエス・ブリタニカ, 11, 713頁。
 - 43) 大江健三郎(1995):『あいまいな日本の私』岩波書店, 7~8頁。
 - 44) 佐伯啓思:戦後知識人の「あいまいさ」THIS IS読売, 1995年3月号, 109頁。
 - 45) 水本雅晴(1988):『ファジィ理論とその応用』サイエンス社, はしがき。
 - 46) 向殿政男(1991):『曖昧』第一章 明治大学公開文化講座, 風間書房発売, 14~57頁。
 - 47) 前掲46), 13頁。
 - 48) 前掲46), 57頁。
 - 49) 向殿政男・本多中二(1990):『ファジィ——「あいまい」の科学』岩波書店, 2~3頁。
 - 50) ウィリアム・エンブソン著 岩崎宗治訳(1974):『曖昧の七つの型』研究社出版, 目次。
 - 51)『平凡社大百科事典』1984, 平凡社, 2巻, 765頁。
- [付記]
- 小論は平成6年1月22日, 歴史地理学会特別例会で約90分間スライド・OHP・大型地図の計69枚を展示して行なった頭書の講演に加除したものである。
- 口頭発表の当日, さらに後日御所見を頂いた各位の御厚情に感謝します。なお本小論と前後して古今書院から出版される『北方四島・千島・樺太』とは, 取り上げた範囲, 地図の枚数に大差はあるが, 一部重複していることを諒承頂きたい。

THREE-MONTH SURVEY OF SAKHALIN BY THE NOVELIST TCHEKHOV IN 1890 : THE CONTACT OF GEOGRAPHY AND LITERATURE

Yoshiaki KAGOSE

1. Dr. Tchekhov, the novelist and medical doctor, visited Sakhalin which had been used as the prison by the Russian Empire, interviewed all the inhabitants on their lives, health, sufferings and state of mind, and observed and surveyed their living environment including the arable land and climate. It was not the material for his art work nor sightseeing, but a great creative act to appeal to the government that the lives of prisoners should be improved.

2. His objectives seemed to be diverted to two directions, but were actually one : "creation".

Dr. Torahiko Terada, a physicist with the highest honor, is also said to be a great artist. However, his goal was not those two, physics and art in separated face, but one ; creation. His student, Dr. Ukichiro Nakaya, is a world-renowned scholar on snow and ice as well as an essayist like his mentor. Soseki Natsume, a novelist whom Terada respected as the mentor, had a strong interest in science. Ogai Mori is respected not because of having been a high-ranking army surgeon and a famous novelist, but because of his high creativity with which he aimed at ideals and improvement.

While everybody has creativity, the important point is that if we cannot achieve it, it does not constitute a contribution to society. As the mottoes to achieve it, Akira Onda, a psychologist, mentions that, autonomy, impact, persistence, spirit of inquiry, concentration, self control, and especially the generosity to allow "ambiguity" are important. I agree with him. The real research is the result of creativity. The research aiming at creation leads to satisfaction and joy beyond the barriers of pain and beauty, interest and pleasure.

Geography has difficulty studying untrodden land, especially the land which cannot be directly seen in the case of historical geography.